

常温乾燥に比べ急速乾燥は粘、弾性が劣り、脂肪酸の分解によって臭気が出る。また、玄米水分が13%以下になれば粘、弾性がなくなり古米のように淡白となる。

佐賀米の評価を高めるには適正な乾燥を行ない、玄米水分の確保が最重点課題と考えられる。

#### 4. 保管倉庫

常温倉庫で貯蔵された米は準低温倉庫米に比べ4月頃より食味は劣り、7月の梅雨以降は食味の較差が大きい

ので、暖地で長期間保管する米は準低温倉庫で保管すべきである。

暖地に向く良質米品種の育成が渴望されているが、現時点ではコシヒカリの面積拡大をはかり、日本晴、レイホウの良質化のために、きめ細かい肥培管理と、適期刈取り、適正な脱穀、乾燥により玄米水分を確保し、整粒歩合の向上によってうまい米づくりを行なうべきであろう。

## 普及の現場から

### 転作秋大豆について

本 田 一 義

(長崎県加津佐農業改良普及所)

#### 1. 地域の概況

島原半島の南西部で雲仙国立公園、湯の町小浜、海上には石油備蓄船団と天草をまぢかにみる。

農業は総農家数 6,827 戸のうち、専業 28 %、1 種兼業 31 %、2 種兼業 41 %で、農家当りの耕地面積は 92 a 土地の利用率は 142 %以上で比較的高い。

主要作目の粗生産額は 142 億円で、バレイショ 20 %、米 18 %、みかん 14 %、プリンスメロン 11 %、その他 26 %のシェアである。

#### 2. 栽培の状況

水田での秋大豆は、棚田の「あぜ豆」としてわずかに点在しているが、水田利用再編対策により 53 年度の実績は、転作面積 267 ha のうち 66 ha ( 21 % )、特定作物の 51 %を占めた。

栽培農家数 1,216 戸、農家当りの栽培面積は平均 5.4 a で、転作田の枚数は 1.6 枚であった。

#### 3. 問題点

品種は農協より 90 %、農家手配が約 10 %で、ホウキョク、アキオンダイズが主体であるが不明確な品種が点在し、栽培および推進に一部支障がみられた。

現地調査の結果から播種期のばらつきが大きく、6 月下旬から 8 月上旬の播種がみられ、また適正な栽植が約 20 %でいどで生育と莢の充実に問題がみられた。

特に病害虫の防除がまづく、開花終期から結莢期のハスモンヨトウなどの被害が甚しく、品質と数量の低下を生じた。

栽培農家のききとりのなかで、収量性がない、調整と粒選に手間を要することが苦になっている。

管内の平均収量は 10 a 当り 120 kg 前後であったが、農協へ出荷された生産物の販売が容易でなかったことは、今後の流通と生産の一貫した対策が必要とされる。

なお、は場排水は良好であったが栽培は場の立地条件が山間谷間など、不適地の栽培がかなりみられ、栽培は場の散在が多く集団転作がないことは、今後の推進普及上における課題と言える。

#### 4. 今後の課題と対策

農家の認識と生産技術を高め平準化するために展示ほの設置が更に必要で、経営面から輪作体系を確立する必要がある。管内における転作秋大豆との主な輪作作物は、冬ばれいしょ、プリンスメロン、飼料作物、小麦、春ばれいしょである。

収穫および脱穀調整の省力としての機械の効率的活用と導入は、共同化と併せ集団化と定着の手段とも言える。なお、各種の事業による基盤整備の実施も集団化の推進に大きな期待がある。

最近ではインスタント食品の利用が多くなった農家も、転作大豆の栽培を機会に自給食品の価値を再認識する必要がある。

管内における転作大豆の栽培を定着の方向として、生産技術を高め、地域の特産作物を主に転作秋大豆は補完的作物としての輪作体系を確立し、生産と生活の結びつきを更に強化していく必要がある。